

運動と思考との連関におけるイメージの位置と役割

仲山佳秀 (Yoshihide NAKSAYAMA)

立正大学

運動と認識とが連関するという見方は古くからある。しかし運動と認識の高次な形式である思考との連関に関する議論は、運動と認識の低次な形式である知覚との連関に関する議論と比べて、圧倒的に不足している。この問題に関する古典的かつ体系的な理論の 1 つはピアジェ (Piaget, J.) の発生的認識論である。

それによれば、運動から抽象的思考までは一つながりの発達の過程である。すなわち出生後最初の主導的活動手段である運動が内面化されたものがイメージであり、イメージが高次化または体系化されたものが操作 (思考操作) である。それゆえ思考は本質的に運動を起源とするイメージである。しかしこの説では、イメージと操作 (高次なイメージ) との間が発達的に不連続であることになる。なぜならイメージが事物の具体的な映像 (内容) を表すのに対し、それが発展してできる操作がイメージの操作 (形式) を表すという質的相違が存在し、かつ操作の本質的特徴である体系性の論拠をイメージおよびその起源である運動から導き得ないからである。これに対してジョンソン (Johnson, M.) は身体化された想像力の理論によって身体または運動 (感覚運動的活動) と抽象的な思考や概念との間の連関を樹立しようと試みる。すなわちジョンソン説によれば、感覚運動活動の抽象的構造である「イメージ図式」または「身体化された図式」が概念的または抽象的領域にメタファーによって投射 (想像的投射) されて、具体的なイメージと命題構造の中間に存在する意味構造を形づくる。同説においてはイメージ図式 (イメージの形式に相当する) と個々の具体的なイメージ (内容) とが明瞭に区別されており、かつ想像的投射 (メタファー) を媒介にして感覚運動的構造と概念的・抽象的構造との対応関係が具体的に示されていることから、同説はピアジェ説を発展させる契機を含むと言えるが、主として 2 つの問題が残されている。第 1 は、ジョンソン説の中心的概念であるイメージ図式の形成の道筋が曖昧であることである。このことはイメージ、イメージ図式、イメージ操作または想像活動などとの区別と相互連関が不明瞭であることと結びついている。第 2 は身体化された図式 (構造) と概念的または抽象的な構造との間に想定されている関係が単純な対応関係であることである。しかし質的に異なる両者の間には互いに還元し得ない部分が残存すると考えられ、それゆえそこにはより複雑な連関が存在するであろう。

本発表では、この 2 点を中心に議論し、それらを通して運動と思考との連関におけるイメージの位置と役割に関して 1 つの解答を与える。